



みなとびあに移築なった第四銀行住吉町支店の列柱をイメージしました

第20号  
2015年12月



◇新潟まち遺産の会会報 第20号  
2015年12月25日発行  
◇新潟まち遺産の会 (代表 大倉 宏)  
〒951-8066  
新潟市中央区東堀前通1番町353  
E-mail: chanoma@machi-isan.sakura.ne.jp  
TEL 025-228-2536 / FAX 025-225-7203  
<http://machi-isan.sakura.ne.jp/>

## ●●●●花街イベントでは初公開の建物も●●●●

9月27日(日)午後、柳都新潟・古町花街イベント「体感 和の文化で味わう古町」を開催しました。花街イベントはもう7回目です。今回は限られた時間のなかで多彩なプログラムを用意し、お座敷遊びとは違う形で花街を「体感」していただきました。

第一部は、ふだん未公開のお稽古場で、お化粧をしていない芸妓さんの舞を見学するというめずらしい体験から始まりました。続いてまちあるきに出発、風情ある路地を抜けて東新道に入り、川辰仲、美や古、旧花岡邸に立ち寄りしました。

川辰仲は、昭和10年頃に建てられた置屋で、粋で瀟灑な造りの中に女性的な佇まいが感じられます。店主の中川凜子さんから、繊細な建具や建物、養母でここに住んだ芸妓の廣子さんから聞いたという往事の暮

らしぶりなどをうかがいました。

旧花岡邸は小唄や清元の師匠の住まいとして、昭和9年頃に建てられたといえます。長らく閉められていましたが、堂々たる構えに目をとめていた方も多いのではないでしょうか。中は座敷ごとに職人の技を凝らし、別世界に足を踏み入れたようでした。

玄関脇の前座敷で、江戸千家の中野宗順先生と芸妓のあおいさんのお点前がありました。

美や古は休業中のため、やはりふだんは入ることのできない建物です。かつては待合で、忍者屋敷さながらの迷路のような造りが特徴です。ここでは岡崎副代表による花街の解説がありました。

第二部は、三業会館ホールでパネルディスカッションを行ない、地元古町花街の方々に、現状や展望について話していただきました。衰退を言われもする花街ですが、再生に向けた新たな動きも始まっています。

今年は申し込みが多く、定員を6人増やしました。その分お稽古場や呈茶が少し窮屈になり、参加者には申し訳なかったのですが、めずらしい体験を楽しんでいただけたと思います。(千早和子)

### 報告・旧會津八一記念館のその後

昨年、当会と地元住民の方々が旧會津八一記念館の保存活用を求める活動を行なった結果、市は取り壊しを撤回し、公募を経て民間企業に売却しました。購入したのはNSGグループの学校法人、新潟総合学院で、作品展示などに使用し、喫茶スペースも設けるなど市民に公開する計画と聞いています。現在耐震等の工事中で、来年春には公開予定のようです。(千早和子)



足場が組まれています。その後防音シートで全体が覆われました。



肥前浜宿(佐賀市)の伝統的な町並み。全国町並みゼミで訪れました。4頁参照。

## 沼垂まちあるき

NPO 法人まちづくり学校が企画運営する「まち歩きブランイガタ」の番外編として、当会が企画し案内した「ブランイガタ 2015 番外編 発酵食品のまち・沼垂を歩く」を、7月4日(土)の午前に行ないました。

当会が企画したまち歩きですから、やはり古い建物に特化した企画です。ほんぽーと新潟市中央図書館前に9時45分に集合し、まずは当会も保存運動に関わった峰村商店へ。

峰村商店では保存運動の経緯を当会から説明し、建物に関しては峰村商店さんから説明をうけました。その後施設内見学を行ない、新たな息吹で運営を始めた古い建物の今を見学しました。

栗の木バイパスを渡り沼垂白山神社へ。弘化4(1847)年に建てられた総檜造りの社殿は唐破風の正面が手の込んだ建物を象徴しています。この建物も道路拡幅に掛かっていて今後が心配されていましたが、解体曳き屋で存続されるとのことで安心です。

次は現代司酒造さんへ。大正時代に建てられたと言われる酒蔵をご主人からご案内いただきました。

旧49号線を歩いていると、沼垂の町並みにも丁字造りの町屋を見ることができます。町屋の外観を見ながら最近もっとも元気がある沼垂テラス商店街へ。

沼垂テラスは寂れ歯抜けとなった常設市場に若者が次々と新しいお店を開店し、ついにはすべてお店が入り活気溢れる商店街となりました。沼垂テラスの再生に関わり、現在この商店街をとりまとめている田村さんから、古い建物の再生利活用のお手本のようなこの商店街再生についての経緯などがいました。参加者も12時30分の解散後、この商店街を堪能していました。

参加者は定員20名を超える30名となり、古い建物に特化したまち歩きの興味深さに概ね高い評価をいただきました。これからも新潟島のまち歩きのみならず、郊外市外の古い建物町並みに特化したまち歩きを企画していきたいと思います。(伊藤純一)

## 講演会で金沢の町家活用を紹介

5月16日(土)、平成27年度総会に引き続き、講演会「金澤町家の継承と活用」を開催しました。定員50名のところ、建築関係の方々を中心に49名の参加者があり、関心の高さを感じました。

講師の川上光彦氏は金沢市のお生まれで、その後県外へ移り、1970年代に大学研究者として金沢市に戻ってからまちづくりに関わってこられました。内側から見てきた金沢市のまちづくりと、氏が代表を務めるNPO法人金澤町家研究会の取り組みについてお話しいただきました。

金沢市の中心部はかつて城郭があったところを中心に、近世城下町の特徴がよく残っています。その歴史遺産を活用しつつ、産業を活性化する政策がとられてきたといいます。まちなかの定住促進政策もとられ、人口減が止まったそうです。

お話を聞くにつれ、歴史的な建物や町並みや景観を残すために、国の制度を活用するだけでなく、職人大学校の設立とか、市独自のさまざまな条例などが幾重にも張り巡らされているという印象が強く、思わず羨望の嘆息がもれるほどでした。

金沢の特徴は、市が積極的にそうした政策を進めてきたことです。それは、市の助役から市長になり20年間勤めた前市長の存在が大きかったそうです。一方で、当会のような市民活動は必ずしも活発ではないというお話でした。

「金澤町家」とはいわゆる町家と武家系の建物を総称した語で、現在でも5000棟以上が残り、8割以上が活用されていますが、年間数十棟は確実に消失し、建て替えられたり空き地になったり駐車場になったりしているそうです。

金澤町家研究会ではそうした町家を活用するために多角的な取り組みを行なっています。改修の専門家組織を立ち上げたり、貸家事業を進めたり、賃貸や売買のコーディネートをしたり、試行錯誤も続いているということでした。(千早和子)

## 燕三条で町並みを考える集い

第10回新潟県まちなみネットワーク大会を兼ねるイベント「美しいいがたフォーラム2015」が、今年は6月6日～7日に燕三条で開催されました。京都府立大の宗田先生の講演、文化庁の島田主任調査官による重要伝統的建造物群保存地区制度の解説がありました。この制度は、今年、創設40周年を迎えます。県内唯一の重伝建地区、佐渡市宿根木では、これまで

に8億円が民家の修理修景に支給されたとのこと。ぜひ、本州側でも活用したい制度です。まちあるきのメインテーマは地場産業でしたが、意外に知らないことが多く、たいへん面白かったです。歴史的建築を活用した「みんなのまちの交流拠点 みんくる」も、参考になる事例でした。来年は5/28(土)に新潟古町で開催されます。ぜひご予定ください。(岡崎篤行)

## ふるまち新潟をどりで初の呈茶に協力

6月21日にりゅうとぴあ（新潟市民芸術文化会館）で開催された「ふるまち新潟をどり」で呈茶が行われました。当会世話人の久保と大倉がお手伝いをしました。その報告です。

\*

27回目の「ふるまち新潟をどり」が開催された今年の6月。約30年、毎年開催されてきた新潟をどりに初めて呈茶席が設けられ、期待に胸躍らせる来場者に上演前一時の癒しを与えてくれました。

私は前日と当日の準備を手伝ったのですが、江戸千家の大家、中野宗順先生の指揮により、空っぽの空間がみるみる内に茶の空気を帯びていく様には、形容しがたい感動を覚えました。

茶道具の拝見台には小さめのテーブル、客の座る椅子は木製の丸椅子に藁草座布団を敷き、水屋の目隠しには周囲の壁と同色の灰色パーティション、と会場にある備品は次々に見立てられ、ホワイエに茶室の世界が創りだされていきます。拝見台に影を投げかける野点で傘は、遠目にはホワイエに立つ紅一点となっていますが、その足元から中を覗けば、飾り糸の鮮やかな色使いが目染み、思わず口辺が緩められます。さらに、そこから視線を下げれば、傘の柄に貝に見紛う円錐型の花入がかけられ、楚々とした姿でそこにある季節の花からは幽寂閑雅の時が滴り落ちるよう。

さて、床の間についてですが、黒色のパーティションを床壁とした、さながら織部床のような簡素でいて侘びた佇まいです。掛かる絵には武者小路実篤により描かれた二輪の華。花には不案内ですが、椿の花ではないでしょうか。「共に咲く喜び」という自画賛もおおらかな筆致で書かれ、いかにも白樺の夢追い人を思わせます。拝見台には、夏の暑さを忘れさせる清流の如きガラスの水指、小振りながらも鋭い存在感を纏った蒔絵の棗が並び、床の間の聖性を高めているのが感じられます。



ホワイエに出現したお茶の世界。カラーでないのが残念です。

これらの後ろには、呈茶席で茶を飲む人とホールを出入りする人の視線を遮る六曲一双の金屏風がありますが、実際席に座ってみると、不思議なことに遮られているという気が全くしないのです。そこには、ただ茶室の「床の間」があるのです。常から私がお世話になっている建築家がお酒の席にて言われた「建築家たるもの、茶を習わずしていかにせん」という言葉の意味を、この度の呈茶席の準備を手伝い、再認識させられました。

日本の伝統建築を扱うなら、その空間を作り出す木材の種類や床の間の意味、動線の重要性は身をもって学ばなければいけない。そう捉えていましたが、日本建築に限らず、茶を習うことで人が安らげる場をつくる専門家に近づけるのだと今は思います。

第一部が幕を下ろし、観客皆ぞろぞろ出てくると、大舞台を終えた芸者衆もそのなりにて出でて、熱醒めやらぬ大衆を再びおおいに盛り上げてくれました。お座敷に見るより厚い白粉に紅さす芸者衆の姿に、吉井勇の「おしろいは厚きが可かり口紅は濃きが可かりといふは誰が子ぞ」の妙味を感じます。

さて、ここからは舞台裏の話ですが、見送りが終わり、観客が皆外に出た頃、宗順先生から芸者衆にお茶がふるまわれました。日々の稽古と直前の踊りで疲弊した身体によほど染みわたるのでしょうか、白粉越しでも分かるほどにその表情は和らいでいました。その後、お茶のスタッフと芸者衆で集合写真を撮ることとなり、私も身を低くしてその中に入らせて頂いた次第ですが、後日送られてきた写真を見ると、どうしても自分の青臭さが目についてしまいました。次にこのような機会が巡ってきた時、もう少し様になっているよう日々心がけねばと思います。来年の新潟をどりにどのような彩りが添えられるのだろうか、渴仰止まぬ今日此の頃。（久保有朋）



呈茶の光景。背後のパーティションの裏が水屋です。

## ||||| 全国町並みゼミに参加 |||||

### I 鹿島・嬉野という町

11月7～9日に開催された「第37回全国町並みゼミ 鹿島・嬉野大会」に、大倉、千早、澤村の3人で参加してきました。鹿島も嬉野も佐賀県です。今回は鹿島市の浜宿地区、嬉野市の塩田津地区を中心に分散開催でした。

鹿島市浜宿は通称「肥前浜」と呼ばれる鎌倉時代以来の在郷町で、有明海に面しているため漁業と交易で栄え、江戸時代には酒造業と宿場町としても賑やかだった地区です。2006年に伝統的建造物群保存地区(重伝建)に選定されています。

嬉野市塩田津は有明海に注ぐ塩田川を河口から7キロほど遡った立地で、川港として、また宿場町として栄えた商業都市です。2005年に重伝建に選定されました。近隣に志田焼という陶器の窯跡があり、そちらでも分科会が開かれています。

初日は鹿島市浜宿の呉竹酒造東蔵を会場として、開会イベント、開催地からの報告、地元のかたを中心とした鼎談のあと、各地からの報告として当会から大倉が報告を行ないました。夜の懇親会が、嬉野温泉大正屋という旅館で、これが吉村順三の設計です。宴会場も和風のすっきりとした意匠でしたが、残念ながら夜間とあって庭園は見られませんでした。

二日目は7会場に分かれての分科会で、当会は嬉野市塩田町の本應寺を会場とした第5分科会「空き家の活用・再生を考える」にパネラーとして参加しました。

空き時間にレンタカーで焼き物で有名な有田に立ち寄り、帰路に吉野ヶ里遺跡に寄るなど、九州の歴史を堪能しましたが、町並みゼミの分散開催の善し悪しも見て取れました。(澤村明)

### II ゼミに参加して

鹿島市の呉竹酒造の大きな酒造蔵の中で開かれた全体会では、「モダニズム建築の保存運動の一例」として旧会津八一記念館の保存運動を紹介しました。

まちなみ見学では、新潟市の白根や小須戸のように川湊として栄えた塩田津の白壁の続く町並みや、有田焼の原料の陶石を運び込む波止場の跡などを見学。嬉野市の志田焼の里博物館では佐賀県の磁器を大量に生産し、全国に販売していた窯業地がそっくり産業遺産として保存されたものを見ました。とりわけ、窯の規模の大きさに圧倒されました。その窯の一つが、なんと分科会の一会場になっていました。

7つに分かれた分科会のうち、私は本應寺での「空き家の活用・再生を考える」に参加し、新潟絵屋や砂丘館の活動を発表・紹介しました。冒頭コーディネー

ターの宗田好史さんから「空き家の増加が全国規模の大きな問題になっている」ことが報告され、あまり絵屋や砂丘館を「空き家の活用」と思っていなかったので、なるほどと思われました。京都では伝統的な町屋から先に新しい使い手が決まってくること。ほかの発表者の事例も、これまでの「伝統的建築」→「価値あるもの」→「保存しなければならない」という立場と違い、もう少し自然体で、魅力あるもののひとつとして、歴史的建造物を自らの事業の中に取り込んで成功されているお話でした。

初めての佐賀でしたが、貸し自転車で土手を走り、干満差の大きな有明海を見たことや、「くど造り民家」をいくつも目撃できたのも大きな収穫でした。

大会前日に宿泊した佐賀市も古い建物が随所にのこる、とても雰囲気のある町でした。(大倉宏)

### アートと民家再生に思う

2015年は十日町で3年おきに開催される「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が開催されました。会員の皆さんの中でも、御覧になられたかたがおられるでしょう。

大地の芸術祭では毎回、十日町の空き民家を利用した作品が展示されます。好みや善し悪しもありますが、単にアーティストの作品を展示する空間とするだけでなく、建具や造作に手を加え、建築そのものを作品に変化させているものもあり、いろいろと楽しめます。残念なのは、多くの作品が一回限りで終わってしまい、常設作品として長期的に見られる民家が増えないことです。

そうした中で、民家再生という点でも注目しているものが二つあります。一つは、松代の商店街で、新潟の彫刻家、村木薫さんが連続して手がけている「土壁プロジェクト」です。ボランティアや住民も協働して、こつこつと、土壁を塗り直すことで、商店街の町屋に新しい風を吹き込もうとしています。「これってアートなの？」という地味な作品群ですが、かえって民家・町屋の再生のヒントになりそうです。

もう一つは個人的なことで、十日町市下条の妻有田中文男文庫です。「現代棟梁」などと呼ばれた田中文男さんは間接的な知り合いで、「大工の文男」を略してダイフミさんと呼んでいました。お互いに噂は聞いていたものついで会うことはなかったのが、大地の芸術祭で図らずも会ったかのように感慨深いものがありました。(澤村明)

☆はみ出し編集後記☆ 前号から一年以上の間が空いたせいもあって文章が盛り沢山になり、編集後記がはみ出しました。写真も少なくなりました。次号は一年以内に目下が目標です。(千早)